

No.148

細谷昂先生に聞く：戦後日本農村社会学者への聞き取り資料

細谷昂・三須田善暢・矢野晋吾・高田知和・牧野修也・福田恵

2020年12月25日

はじめに

矢野晋吾*・高田知和**・牧野修也***・三須田善暢****・福田恵*****

われわれ「戦前期農村社会学研究会」は、日本農村社会学の成立過程を戦前期から活躍してきた社会学者に注目し、有賀喜左衛門・鈴木栄太郎らのいわゆる「家・村理論」が成立する前の事情を検討している。その研究の過程において、戦前期の研究を固定するのではなく戦中期・戦後期との連続・非連続において、さらには現代への射程をも念頭において検討を進める必要を感じ、今日の村落研究者への聞き取りを重ねている。これまでに笹森秀雄先生、柿崎京一先生、高橋明善先生らにもお話をうかがっている。

今回、細谷昂先生への聞き取り記録を先生の了承のもと公表する。この聞き取りは、事前に我々から聞き取り項目を提出し、先生から詳細なコメントを文書でいただき、それを踏まえておこなっている。今回公表する聞き取り資料が「一問一答形式」のようなのはそのためである。聞き取りは2018年12月23日（矢野、牧野、三須田の3人）および2019年3月17日（5人全員）の2回、仙台市内でおこなった⁽¹⁾。

ご覧になればわかるように、われわれの質問の一部は、先生にとっては、「なぜそのような質問が来るのか」と訝しく思われたものであった。こちら側の意図を十分に説明できなかったため、当日はそのあたりの補足説明をさせていただいたが、訝しく思われた理由には当時の時代感覚がわれわれに欠如していたこともあろう。また、今回はいわゆる生活史的な調査は出来なかった。くわえて質問の掘り下げが浅く稚拙な部分もある。しかし、日本農村社会学展開史を検討していくための貴重な資料であると思ひ公表する次第である。細谷先生にはあらためて御礼申し上げます。

なお本研究はJSPS 科研費 17K04150 の研究成果である。

2020年12月25日

(1)細谷先生への聞き取りに関しては他にも以下のものがある。

伊藤勇，2013，「庄内農村研究の「方法」と実際（上）——細谷昂・菅野正両氏に聞く——」『福井大学教育地域科学部紀要』第3号，福井大学教育地域科学部：89-129.

細谷昂，2017，「庄内モノグラフ調査をめぐって」『村落社会研究ジャーナル』第23巻第2号，日本村落研究学会: 13-24.

*青山学院大学総合文化政策学部 **東京国際大学人間社会学部 ***神奈川大学 ****岩手県立大学盛岡短期大学部 *****広島大学大学院人間社会科学部

目 次

はじめに

細谷昂先生への聞き取り

付録 関連する資料

細谷昂先生への聞き取り

【参考：細谷昂先生の経歴】

- 1934（昭和9）年8月28日、東京生まれ
- 1941年4月 山形県師範学校附属国民学校入学。
- 1942年11月 宮城県女子師範学校附属国民学校転入学
- 1947年3月 宮城師範学校女子部附属国民学校卒業
- 1947年4月 宮城師範学校女子部附属中学校入学
- 1950年3月 東北大学宮城師範学校附属中学校卒業
- 1950年4月 宮城県仙台第二高等学校入学
- 1953年3月 宮城県仙台第二高等学校卒業
- 1953年4月 東北大学文学部入学（教養部）
- 1955年4月 東北大学文学部社会学科進学
- 1957年3月 東北大学文学部社会学科卒業
- 1957年4月 東北大学大学院文学研究科（社会学専攻）修士課程入学
- 1959年3月 同上 修了
- 1959年4月 同上 博士課程入学
- 1962年3月 同上 単位取得退学
- 1962年4月 東北福祉大学社会福祉学部講師（-63年9月）
- 1963年10月 東北大学講師川内分校
- 1964年4月 東北大学講師教養部
- 1966年2月 東北大学教養部助教授
- 1977年4月 同上 教授
- 1982年4月 東北大学評議員併任（-85年3月）
- 1985年4月 東北大学教養部長併任（-89年3月）
- 1993年4月 東北大学大学院情報科学研究科教授（-98年3月）
- 1993年4月 東北大学評議員併任（-97年3月）
- 1998年4月 岩手県立大学総合政策学部教授（-2005年）

【1回目の聞き取り】

日時：2018年12月23日（日）10時-12時すぎまで

場所：仙台市木町通市民センター第二会議室

【質問項目】

I 研究歴について

(1) 細谷先生が学部時代の東北大学での社会学での社会学教育はどのようなものであったのでしょうか。菅野正先生へのヒアリング記事を読むと、体系的に行われたわけではないようにも読めましたが、細谷先生の時にはどうであったのでしょうか。

細谷先生回答：菅野先生のヒアリングとは、どの文献かわかりませんが、体系的でなかったとお話だったのででしょうか。しかし、新明正道先生の講義は、総合社会学の「体系」そのものお話でした。ただ、一年の講義ですべて語るわけにはいきませんから、年によってジンメルだったり、ウェーバーだったり、パーソンズだったりしたわけですね。私が学部から院生時代に受けた授業は、新明先生の講義、演習が中心で、他に家坂和之助教授の講義、演習、また教養部の対馬貞夫先生の授業もあったと思います。

(2) アルフレート・ウェーバーを卒業論文に選んだ理由は何でしょうか。そこから、マンハイムからマルクスへと研究対象を進めていった契機は何でしょうか。

細谷先生回答：アルフレッド・ウェーバーをなぜ卒論に選んだか、よくわかりません。大学に入って初めてドイツ語を習って、新明先生もドイツの社会学者の話をよくなさって、何とはなしにドイツの社会学者にあこがれのようなものがあつたのでしょうか。また、ジンメル等の「形式社会学」には、新明先生の話でも何となく面白みを感じられず、それに反して「文化社会学」が「内容」があつて面白そうだという感じを持ったのかもしれません。A.ウェーバーの他、シェーラーやマンハイムを読んでいるようです。私の「勉強ノート」（※後掲）を参考にして下さい。そのなかではA.ウェーバーが、議論が単純で、分かりやすかつたのでしよう。いささか功利的にいえば、*Prinzipien der Geschichts- und Kultursoziologie* という本を一冊読めば、まあその理論の大筋は分かる（と思った）ので、教養部で習ったばかりの出来ないドイツ語で卒論を書くには一番手頃だったということだったのかも知れません。

そこからマンハイムに行ったのは、「イデオロギーとユートピア」が面白かつたからだと思います。今読んでもマンハイムのイデオロギー概念の諸形態の議論等はとても面白いと思いますよ。その下敷きになっていたのは、意識の存在拘束性というマルクスのイデオロギー論で、マンハイムから「ドイツ・イデオロギー」に向かうのは、自然な一歩です。この間の関連は、ちょっとこれらの文献を覗いてみたらすぐ分かるはずですね。この時代の、かなり哲学があつたドイツ社会学を読むのは頭の訓練になりますので、最近、若い日本の社会学徒

がかつてのドイツ社会学の古典を無視しているのは、とても残念です。

(3) 先生が理論・学説研究にくわえて、農村部の実証研究をおこなうようになったきっかけは、どのようなものだったのでしょうか。新明先生の指導によるものでしょうか。竹内先生による影響が強いのでしょうか。あるいは研究室の諸先輩の影響や時代状況によるものでしょうか。

別言すると、学部や大学院の時に、東北大学社会学研究室での農村を含む地域社会への関心はどうであったのでしょうか。チームを作って、地域調査を行うということは多く行われていたのでしょうか。

細谷先生回答：この質問がなぜ問題になるのかが分かりません。おそらく、農村という調査対象が、特別な意味を持つ時代になっているからでしょう。つまり、今は都市に住む社会学者にとって普段なじみのない、わざわざ特別な考えで取り上げる研究対象になっているからではないでしょうか。しかし私の時代はそうではありませんでした。むしろきわめて普通の、日常的に近所を往来する人々の生活の場であり、社会だったのです。

そういうだけでは分かりにくいでしょうから、やや遠回りになりますが、私と調査の関わりについて説明を追加しますと、まず、新明先生は自分ではまったく調査はなされたことはなく（このことは、当時の社会学が、ドイツ社会学の影響でしょうか、哲学の一分野のような位置におかれていて、理論ないし学説が実質的内容をなしていませんでしたので、新明先生だけではありません）、私の学生、院生時代も、ご自分では全く調査はなさいませんでした。しかし、アメリカ社会学を読まれた影響でしょうか、これからは社会学は調査が重要だという考えを持っておられて、研究室の若い弟子たちには、調査をやりなさいとしきりに仰っていました。そして科研費をとって、研究室のメンバー（助手、特研生、院生）達に調査をやるように勧めておいででした。

その成果が白石市の「町村合併調査」（『社会学研究』第11号）や、釜石の「産業都市調査」（『社会学研究』第17号）でした。これらには、私も前者には学部学生として、後者には大学院生として参加しています。ここで注意してほしいのは、研究室を挙げてのこれら調査が、「地域社会」の調査であることです。これはおそらく、新明先生の社会学体系が「総合社会学」であったことに関わるのかもしれませんが。つまり、人間行為を「生活遂行的（＝下構）」、「生活構成的（＝中構）」、「生活表現的（＝上構）」と三分して、社会をそれらの総体からなるものと捉える立場です（『社会本質論』196 ページ）。「釜石調査」が、産業都市の分析を「経済過程」、「媒介過程」、「政治過程」という三つの側面からなるものとして描こうとしているのは、その反映かもしれませんが（新明先生自身はかならずしもそういう理解には賛成していなかったようですが）。新明門下に家族社会学が育たなかったのも、家族（少なくとも都市家族）が、このような「総合」的把握にはなじみにくかったからかもしれません。

次に「私が参加した社会調査」の表（※後掲）をご覧頂くと、上に述べた新明研究室の「町村合併調査」や「産業都市調査」に続いて、農村調査だけでなく、労働組合調査やマスコミ調査などさまざまなテーマの調査を行っていることに注意して頂きたいと思います。当時、NHKのテレビ放送開始(1953年)に続いて、民間放送でも、そして地方局でもテレビ放送が開始され、その社会的影響への関心が広がっていたこと、また労働組合運動と経営者側との対立が社会問題になっていたことなどを反映しているといえるでしょう。また経済学部の木下先生を担いで市場調査も行っていますが、これは当時まだ調査会社が成熟していません、大学にそのような調査の要請が来たからでしょう。私の場合はとくに、東北福祉大で、社会調査実習という授業を担当して毎年実習調査を行わざるをえず、そのテーマと対象地の選定に苦労したことがここに示されているように思います。

ご覧のように、そのようなさまざまなテーマの調査において、調査対象に農村が選ばれています。しかしこれは、とくに農村に関心があって、対象地に選んだというよりは、仙台などの都市を対象にすると、調査地域が広くて、サンプリングや調査実施に困難が伴う（都会人は調査員をなかなか好意的に受け入れてくれないなど）ので、行きやすく、かつ調査しやすい近在の農村に対象地を設定したというかなり便宜的な理由もあったと思います。そういう対象地設定から逆にテーマを農業、農村の問題に決めたということもあったと思います。

私が、それと意識した本格的な農村調査を行ったのは、1960年の庄内北平田における農民意識調査ですが、この調査結果によって1961年の第9回村研大会に、塚本哲人・佐藤勉・細谷昂・北森義明・舛田忠雄の5人の連名で「農民組織と農民意識」という報告を行っております。これが私の村研の初登場です。しかしこの北平田調査は、ランダム・サンプリングによる統計的調査で、後の庄内モノグラフ調査とは連続しません。なお、この北平田調査の結果によって、私は雑誌『思想』1962年7月号、1963年1月号に「農民意識の変容と停滞」という論文を書いています。その際先行研究として意識していたのは、福武直・塚本哲人『日本農民の社会的性格』（1954年）でした。

(4) 先生が農村研究を開始された当時（1960年代）、有賀喜左衛門、鈴木栄太郎に対しての先生の認識はどのようなものだったのでしょうか。古い、克服されるものとしての把握が強かったのでしょうか。別言しますと、『思想』の農民意識論で福武批判を書いています。福武氏のような近代化論（＝ある意味、旧来の家・村論への否定的評価）へのスタンスは、先生はどのようなものだったのでしょうか。

細谷先生回答：この後私はほぼ毎年村研大会に参加するようになって、有賀先生など村研の先生方にも面識を頂くようになったわけです。先の私の「学部生・院生時代の勉強ノート」によると、1961年11月以降のノートに、綿谷赳夫氏の論文を読んでいるようですが、これまでの私の勉強の中に農業経済学分野ははいていませんし、これが突然出て来るのは、お

そらく村研で知り合った島崎稔さんに勧められたからではないかと思います。というのは、島崎さんは、その著『日本農村の構造と論理』(1965年)でも、農地改革後の自作農民の性格を示す理論として、肯定的に引用しているからです(53ページ)。

私が鈴木栄太郎先生や有賀喜左衛門先生の研究を読むのは、もっと後、これら両先生の『著作集』が出てからのようです。というのは、ノートではない原稿用紙に書いた1991年の読書メモが、残されているからです。つまり上の質問に関していうと、有賀先生や鈴木先生への認識はほとんどなく、村研で出会う偉い先生という程度だったのではないかと思います。両先生の業績に認識を深めるのは、庄内調査のなかで、家、村が日本農村で果している大きな役割を認識するようになってからのように思います。福武先生についても、その農民意識の「矛盾的性格」としている点に、いわゆる「土台・上部構造論」的観点から批判しているだけで、三須田君のいう「近代化論」云々という文脈での批判ではなかったと思います。

(5) 関連して、『農民生活における個と集団』で、有賀・鈴木らの日本農村社会学の学説を先生の立場から整理されていますが、この時は家・村論への肯定的な姿勢が強くでてるように思われます。この時に意識的な検討・整理をされた事情はどのようなものだったのでしょうか。またこの時点の整理での発見などは、先生はどのように考えていらっしゃいますか。

1973年の『社会学講座』所収「農民意識と農村社会の変革」で、ご自身の意識研究を自己批判されておりますが、その契機はどこにあったのでしょうか。このことと、先生のマルクスの学説研究とは関連するように思うのですが、いかがでしょうか。

細谷先生回答：これらの文献について、一つ一つご質問に答えるのはかなり時間がかかりそうですので、私の考え方の変化の基本について一括してお答えしますと、私の農村社会学における「マルクス主義」的観点への自己批判は、おそらく二つの要因があったと思います。つまり、一つはマルクス思想そのものに対する学説研究をしてみると、いわゆる「マルクス主義」がその名に似ても似つかぬものであることが分かったこと、もう一つは庄内農村に対する実証研究です。前者については、拙著『マルクス社会理論の研究』(1979年)をご覧頂ければ、おおよそはご理解頂けると思いますが、後者については、村研のモノグラフ研究会の席でも申しましたように(『村研ジャーナル』第46号)、島崎稔さんに佐藤繁実さんという方を紹介して頂いたことが大きかったと思います。佐藤繁実さんは、飽海郡八幡町大島田部落の大規模農家の次男坊として生まれました。ですから、旧制の酒田中学卒業後、東京に出て、明治大学政経学部に入り、その大学院で修士の学位までとった方です。しかし都会で就職することはせずに、庄内に戻り、農家を訪ねては経営指導などをしていました。何で生活していたのか、お宅を訪ねると、いつも奥さんがミシンを踏んでいた思い出があります。

この佐藤繁実さんという人を知った最初は、島崎さんに誘われて土地制度史学会に一度

だけ出席した時に、庄内農業の状況について報告したのを聞いた時でした。その後、これも島崎さんに誘われて、佐藤繁実さんと一緒に、余目近くのある部落を訪ねて話を伺った時です。農家で泊めて頂いたのですが、夜中まで、島崎さんと佐藤さんが農地改革後の土地所有について議論しているのを聞きながら、私は眠くなって寝てしまいました。翌日、島崎さんは東京に帰り、私は一人残って、佐藤さんの紹介の酒田近くの農家を訪ね、さらに話を聞きました。ちょうど庄内の農家で部落ぐるみの集団栽培が模索されている時で、その議論に指導的立場で加わっていたのが佐藤繁実さんだったわけです。この時から彼と私の密接な交流が始まって、私の庄内モノグラフというべき調査が始まります。「家・村論への肯定的な姿勢」に立って調査したのではなく、調査した家・村の実態そのものから、「家・村への肯定的姿勢」が醸成されたのだと思います。

(6) 当時、教育学部の先生と研究上の交流をおこない影響をうけることは、文学部としてはかなり特殊だったように思います。このあたりの当時のかかわりをお伺いできますでしょうか。先生と、教育学部の田辺寿利先生や竹内利美先生などとの研究的交流はどのぐらいあったのでしょうか。

関連して、田原音和先生が教育学部にいらしたことで、教育学部教育社会学研究室と文学部社会学研究室の研究的交流が頻繁に行われたのでしょうか。

細谷先生回答：新制大学発足直後に東北大学にも「教育学部」がおかれ、そのいわばパン種は文学部の「教育学講座」にありました。僅か一講座ですが、私の父細谷恒夫がその担当をしていて、初代の教育学部長として、新学部作りをしました。そこに採用された人々は、そういう縁で東北大学文学部出身の人が多かったようです。社会学でいえば、教育社会学講座の助教授として佐々木徹郎さんが採用されていました。田原さんは、それよりやや後かと思いますが、社会教育学講座の助教授になっていました。その後、教育社会学講座の助手に、東北大学出身ではないと思いますが藤木三千人さんが採用され、また東北大学出身の江馬成也さんが社会教育学の助手になりました（藤木さんは後に東洋大学教授、江馬さんは宮城教育大学教授になられた方です）。そこに、これら両講座の、いわばトップとして社会教育学の教授に迎えられたのが竹内利美先生でした。国立大学ですから、むろんきちんとした選考委員会が置かれ銓衡されたのですが、竹内先生の名前を挙げて推薦したのは、学部長の私の父が、かつて小学校の教員をしていて小学生に郷土調査を指導した竹内先生の仕事に感銘を受けたためのようです（竹内利美『小学生の社会調査』1948年）。それ以後、東北大学教育学部では社会教育学と教育社会学の二講座が、事実上一つの研究室として運営されて行きます。この頃、竹内先生と二人の助手の共同で発表された農村社会学的調査研究が、有名な「東北農村の年序組織」です（竹内・江馬・藤木「東北村落と年序組織」『東北大学教育学部年報』第7集、1959年）。田辺寿利先生が赴任されたのは、これらの先生方より後です。

そういう経過もあって、東北大学文学部の社会学研究室と教育学部社会教育学・教育社会学研究室とは、親しい関係でいろいろと交流がありました。が、文学部の方は新明先生の下で、どちらかといえば学説ないし理論研究、教育学部の方は調査による実証研究と、いわばお得意分野の対照的な特徴を持っていたといえましょう。そこで、竹内先生が主宰する科研費調査に文学部関係の人たちが呼びかけられ、参加することも多く、私も参加した1960年の「東北農村における新機能集団」の調査などはその一例です（竹内利美編『東北農村の社会変動』1963年）。前に述べた塚本さん中心の庄内北平田調査もこの科研費調査の一環でしたし、その他、私が参加した教育社会学研究室中心の調査を記しますと、菅野正さん、佐々木徹郎さん、江馬成也さんなどの岩手県田頭調査や、江馬成也さん、森博さん、竹内先生などの福島県梁川町栗野調査などがあります。私が養蚕の村を訪ねたのは、この梁川調査が初めてでした。

(7) いわゆる中村史学に先生は大きな影響を受けていると理解しておりますが、先生としては中村史学のどの点を強く摂取したとお考えでしょうか。また、中村史学の影響は、先生以外の先生（菅野先生、田原先生）へはどのようなものだったでしょうか。

細谷先生回答：中村吉治先生から影響を受けたということは、全くないといってよいと思います。中村先生は経済学部の教授で、私は文学部でしたから、授業を受けたことも調査に同行したこともなく、村研で年に一度お会いする偉い先生、という記憶だけです。村研では、中村先生はむしろ寡黙で、中村門下の村長利根朗さんや矢木明夫さんなどが活発に発言していた記憶があります。私が中村先生の業績の一端をはじめて授業で学んだのは、竹内先生の大学院の演習で、その時のテキストは、中村吉治『日本の村落共同体』（1957年）でした。中村グループの有名な煙山調査（『村落構造の史的分析』1956年）を読んだのも、私の手許にあるのは第二刷の1966年発行のものですから、その頃のことなのでしょう。田原、菅野両先輩への中村史学の影響は分かりません。多分私と同じで、新明先生の下で、菅野さんはウェーバー、田原さんはデュルケームの学説研究をやっていたわけですから、中村史学の影響というようなものはあまりなかったのではないのでしょうか。

(8) 関連して、日本資本主義論争での講座派、労農派、くわえて宇野派といった潮流（さらには論争に直接関連しないが中村史学）に対しての、先生のスタンスはどのようなものと理解したらよろしいでしょうか。

細谷先生回答：自分ではよく分かりませんが、当時の「進歩派」学生の通例として、「マルクス主義」の影響下にあったことは確かです。学生時代は、文学部ですから経済学分野などでやかましかった講座派、労農派、あるいは宇野派などの区別もよく分からずにいたと思います。しかし院生時代になると、村研で島崎さんとの交流が出来て、いくつかの文献を読む

等して、講座派の方に親近感を持っていたと思います。私の書棚には、山田盛太郎『日本農業生産力構造』（1960年）などもあって、たしかに読んだ記憶はあります。土地制度士学会に一度だけ参加して、山田盛太郎の講演を聞いたこともあります（先に述べた佐藤繁実さんの報告を聞いた時です）。しかし他方、大内力『日本農業論』（1978年）も書棚にありますから、あちこち覗いていたのだと思います。先に述べた綿谷赳夫氏の論文を読んだのもその一環だったのでしょう。

（9）村落調査や史料調査、インタビュー調査における菅野先生、田原先生、細谷先生の役割分担や具体的な調査の進め方はどのようなものだったのでしょうか。調査者の世代が異なること（各自の時代経験や学問的摂取の違い）で、聞き取りの内容や方法に違いなどあったのでしょうか。

細谷先生回答：これは前にもどこかで述べたことがあるように思いますが、三人で役割分担はしないというのが、^{としがしら}年頭であり事実上のリーダーであった菅野さんの方針でした。ですから、誰かに会って話を聞くときは必ず三人一緒に、したがって同じ対象者の、ただしそれぞれが書いた面接記録が三人のノートに残っている。なにか議論をする時には、同じ時の同じ面接内容を材料にして議論するという状況でした。一番年若く、調査経験も幼かった私が一番それで勉強になったことはいまでもありません。「聞き取りの内容や方法の違い」（上手と下手の）があったことはいまでもなく、私の農村調査の力は、この両先輩との共同調査で養われたに違いありません。

II 生活史について

主に以下の点について、生活史をお伺いしたく思います。差し障りのない範囲でご教示いただければ幸いです。（※質問項目の一部略）

（1）幼少時、当時の世相および農村社会についてどのように見て、感じていらっしやったか。

- ・戦争への認識。
- ・農村の風俗・習慣。古いもの、封建的なものとしてとらえていたか。
- ・農地解放などへの考え。

細谷先生回答：これらについては、先に触れた点もありますが、一つだけ書き足しますと、私の子供の頃は都市と農村の関係が今よりもずっと近かったと思います。私の経験は仙台ですが、しょっちゅう籠を背負ったりリヤカーを引いた農家のおじさんやおばさんが野菜や果物をもって家々を廻っていましたし、また漁村からも獲れたての魚をもってやって来ました。今でも記憶しているのですが、私の家で長男が生まれた時、お得意さんになっている漁村のおばさんが、キチジを一匹持ってきてプレゼントしてくれました。仙台では、その

頃おめでたにはタイではなく、同様に赤い魚のキチジを供える習慣があったのです。

また、戦争中には、父親と一緒によく農村に買い出しに行きました。その頃は買い出し列車が走っていて、乗せられるのは無蓋貨車、ポーッと鳴ってトンネルに入るときは、乗っている人は皆伏せをして、煙をやり過ごします。普段使わない箆笥のなかの着物等を持って行って、サツマイモやジャガイモと取り替えるのです。ある農家で、おじさんが都会の人がこんな風にやって来て敬意を払ってくれるのは、何時までだろうか、やがて前のように農家なんてと軽蔑されるようになるだろう、という趣旨のことだったのを聞いて、そんな時がくるとは信じられませんでした。この時の農家のおじさんの言葉は、当時の都会人の一般的な意識をさしていたのでしょうか。社会科学でいわれていた「古い、封建的」などの考えが、その反映でなければいいのですが。

(2) 終戦とその後の民主化をどのように受け止めたか。お父様（恒夫氏）がどのように受け止めたかをお聞きになったか。

細谷先生回答：8月15日の敗戦の詔勅を聞いて、そばで一緒にラジオを聞いていた母に、私が発した最初の一言は、「今夜から電気をつけて寝られるの」でした。これははっきりと覚えています。つまり「民主主義」などというイデオロギーではなく、開放感です。戦時中、「大日本帝国萬歳」といい続けて、小学校の子供にも軍事教練等をさせて来た学校の先生が、ふっつりとそんなことはいわなくなって、自由、民主主義などいい出したのには、不信感を持ちました。教科書の炭塗りもやりました。新制中学校が発足して、遊びやスポーツに毎日を謳歌しました。私は卓球部でした。やがて高校に入ると、社会科で「民主主義」という授業がありました。そのノートは今でも私の手許にあります。その最初のページは「イギリスに於ける民主主義の歴史的発展」です。続いて「フランスに於ける民主政治の発展」としてフランス革命の歴史のなかで「自由、平等、友愛」というスローガンが説明されています。それから「アメリカに於ける民主政治の発展」で、ここでノートは終わっています。民主主義のイデオロギー教育はなされていませんが、かなり丁寧な歴史的解説です。つい先年までこれらの国々は「鬼畜米英」だったことを思うと、立派な授業だったと思います。

(3) なぜ東北大学へ進学されたのか。なぜ文学部社会学専攻なのか。

細谷先生回答：「何故」ということはないと思います。仙台に住んでいて、入れそうだから受けたのです。当時は、国立大学は試験期日が一期校と二期校に分かれていて、東大、京大、東北大、北大、阪大、九大、名大などいわゆる旧帝大は一期校、その他いくつかの「新制大学」が一期校で、東北地方では、東北大学の他に岩手大学が一期校でした。

東京などに出なくとも家から通える仙台に東北大学があるのに、無理して東京に出たりしたら、月給とりの我が家など、経済的に大変だという状況でした。仙台二高は一学年150

人でしたが、私が大学受験した 1953 年には、浪人・現役を含めて約 100 人が東北大学に入りました。東大に行った人もいましたが、おそらく 10 人位で、私の友人は、親が東京に転勤になるというので、仕方なしに東大に行ったようでした。

社会学は、文学部に入ってから、同じ仙台二高出身の友人が、新明先生という偉い先生がいるそうだというので、友達数人で受けました。教養部から後期課程に進学するのに、希望者が定員より多いと、教養部時代の成績で篩われるのです。社会学は定員 20 人を数人ですがオーバーでしたが、幸い友人たちとも皆合格しました。

(4) 当時の文学部は具体的にはどのようなところだったのでしょうか。新明先生の最初の印象、影響は。どんな方々がいたのかについて。

当時の学生生活について。部活動について。学生運動との関わりは。

細谷先生回答：文学部では、その分野でそれぞれ名の通った偉い先生の、社会学、哲学や宗教学、歴史などの講義を聴きました。いわゆる詰め込み式の授業ではなく、先生たちの講義はあまり流麗ではなく、むしろ咄咄とした話し振りでした。授業とともに、サークル活動などで青春を謳歌しました。例えば、高校も一緒だった友人から、東北大学に演劇部はあるけどラジオドラマをやる部はない、皆で作ろうと呼びかけられたので、とくに演劇やドラマに関心、能力があったわけではないけれど、そのグループに入って、ラジオドラマの練習等で日々を送りました。私は演技は下手なので俳優は勘弁してもらって、「オトヤ」つまり波の音とか、ドアの開く音とか、効果音の担当をしていました。その部は、今は後輩たちの力によって、放送研究部として立派に発展していて、今年NHKのラジオドラマコンクールで全国優勝しました。

学生運動はあまりやりませんでした。大学院生の時がちょうど 60 年安保闘争の年で、学生運動が盛り上がった時でした。その刺激を受けて、大学院生も院生会を作ったりして、それなりの活動をしました。学生自治会と一緒に町に出てデモをやる等の他、院生会らしい活動として、農学研究所や経済学部の院生と一緒に、安保改定に関する農民の意識を調査したりしました。この時の仲間がその後の村研メンバーの安孫子麟さんや東敏雄さんです。

(5) 学部を卒業する当時、将来をどう考えてらっしゃったか。研究者の道を考えたのはいつごろでしょうか。その理由は。

細谷先生回答：いずれも曖昧な答えで恐縮ですが、当時社会学の学生は、ほとんどの人が放送局や新聞社等マスコミの道に進むのが希望でした。私も人並みにNHKを受けてみようかと思ったのですが、同じ仙台二高出身で社会学の親しい友人が、お前が受けると俺が落ちる、受けなくてくれといわれて、あきらめました。その友人は、難関だったNHKに美事に合格しました。他の仙台二高出身で社会学にいた友人は東北放送、読売新聞などに入りました。

た。皆それぞれに活躍して、偉くなりました。

大学院に入ったとなれば、それはそれで、新明先生の下で、張り合いのある勉強生活を送りました。先にお見せした「勉強ノート」がそのことを示しているでしょう。

【2回目の聞き取り】

日時：2019年3月17日（日）10時-12時まで

場所：仙台市木町通市民センター第二会議室

【質問項目】

(1) 前回お聞きした (3) の質問について、もう少しおうかがいしたいと思います。

(3) について先生は、「この質問がなぜ問題になるのかが分かりません。おそらく、農村という調査対象が、特別な意味を持つ時代になっているからでしょう」とお答えになりました。

実は、私どもが前回この質問をお聞きした意図は、“先生方の世代（さらにはそれ以前の世代）の研究者は、強い現実的問題意識が先行して村落研究をしているに違いない（たとえば福武氏が日本農村の封建遺制を強い問題意識としたように）”といった前提（思い込みかもしれません）があり、それを前提して考えるとき細谷先生が農村部の実証研究に向かわれた（現実的・学問的）問題意識、さらにはその後も農村研究を継続された問題意識を、確認しておきたいというものでした。

先生は回答のなかで、農村部（あるいは地域社会）の調査を開始された理由として、(1) 新明先生に調査をしろと勧められ、また先輩の調査（最初は釜石という都市部ですが）に参加したこと、(2) 東北福祉大学の社会調査実習で毎年実習調査を行う必要があったこと、その場合の調査実習先の選定理由について「とくに農村に関心があって、対象地に選んだというよりは」「行きやすく、かつ調査しやすい」からという便宜的な理由もあったかもしれない、とおっしゃっておられます。

もちろんこれらの要因もあったかと思いますが、それ以外の、当時の現実的・学問的な問題の影響といったものは、どのように考えたらよろしいでしょうか。

細谷先生回答：まず農村社会学といっても、私が先ず取り組んだのは、農民意識論でしたが、そのことの「学問的」影響関係は、当時の『社会学評論』の私の論文のテーマを見て頂ければよいと思います。つまり、第36号(1959年)に「歴史主義的思考と知識社会の論理」という論文を書いていて、ここではマンハイムの知識社会学が主題になっていますが、これは新明先生の流れです。新明先生は、ジンメルやM.ウェーバー等の学説研究に基づいて、総合社会学を主張した社会学者でしたが、その議論の一郎に社会意識論がありました。例えば、新明正道『知識社会学の諸相』（實文館、1934年）や、新明正道『イデオロギー論考』（関書院、1949年）などです。私は、その影響下にマルクスやマンハイムを読んでいて、『社会学

評論』第36号(1959年)に「歴史主義的思考と知識社会学の論理」という論文を書いています。それを農村にもって行って、私が農村社会学の研究でまず取り組んだのが農民意識研究です。他方、農民意識研究は福武先生門下の東大グループの人たちも取り組んでいて、当時の農村研究の主要テーマの一つになっていました。その背景は、戦後の「日本社会民主化」という課題意識にあったと思います。軍国主義一色に塗りつぶされた戦時中の日本社会をなんとか民主主義的社会に改革しようという、当時の日本人の知識人の一般的な意識です。そのためには、農村社会の民主化が喫緊の課題だと考えられていたのです。

そのあたりの雰囲気は、『社会学評論』第43・44号(1961年)をご覧頂ければ理解できるでしょう。この号で『評論』は、「農民の社会意識」という小特集を組んでいて、論文として福武門下の園田恭一さんの「農民の社会意識—最近の営農意識と政治意識とをめぐって」、私の「農民意識理解の一視角—イデオロギー論の立場から」、それに「討論」として、島崎稔さんの「意識研究についての感想」、および松原治郎さんの「農民意識への社会学のアプローチ」が掲載されています。これらの論文は、基本的には日本社会の民主化という課題意識に立っている点では共通ですが、しかし微妙な食い違いがあります。そのあたりは皆さんがご自分で読みとって下さい。

私は、この論文に示されたような考え方を持って、1961年に行われた塚本哲人さんを中心とする北平田調査(竹内利美先生を代表者とする科研費調査)に参加し、その調査票作りを任せられました。今思えばまだ調査実績もないのに、よくも大仕事を引き受けたものだと思わずかしくなりますが、ともかくなんとか作り上げて、その結果を使って書いたのが、「農民意識の変容と停滞」と題する『思想』(1962年7月号、1963年1月号)の論文です。これは、福武先生と塚本哲人さんの共著『日本農民の社会的性格』(1959年、有斐閣)をターゲットにしていますが、日高六郎先生に書いてみたいとお願いしたら、書いてごらんないといって『思想』で紹介して下さったものです。東北大の一院生が東大の先生に、しかも東大の先生批判の論文をお願いしたのですから、我ながら図々しい仕草ですが、まあ若気の至りということだったのでしょう。他方、塚本さんはこの時の北平田調査によって、竹内利美編『東北農村の社会変動』に掲載された「水田単作地帯農村における新機能集団の展開」という論文を書いています(前回配布の「私が参加した社会調査」を参照※後掲)。竹内さんも塚本さんも、よく私の勝手な行動を許して下さいと、今では感謝の気持ちで一杯です。

(2)この点に関連しまして、先生が初期に都市調査、町村合併調査、労働組合調査、マスコミ調査などさまざまなテーマをされていったなかで、また、量的な調査票調査やランダム・サンプリングによる統計的調査も経験されたなかで、その後、いわゆる質的なモノグラフ調査による村落研究に収斂していったのは、どうしてでしょうか。

ひょっとすると、この質問も、“なぜこれが質問になるのか分からない”と返されそうですが、この質問をする背景には、昨今の研究手法を精緻化するべきという、社会学界の潮流と、そのなかで質的調査の手法が「科学的」「分析的」ではないと(特に計量畑から)批判

されがちな雰囲気、および「村落（農村）社会学」の存在意義をアカデミズムで理解されにくくなっている状況と多くに研究者が村落研究を離れていったということがございます（地域おこしや政策との関係ではまた別のことがいえるかとは思いますが）。モノグラフ方法自体村研の「伝統」であるので、村研のなかにいる限り方法的な批判はないとは思いますが、これまでの日本社会学の世界のなかで、質的なモノグラフ方法を選択されるにあたって、もし先生が葛藤されたこと、それらの批判を受けて考えてきたことなどがございましたら、ご教示いただきたく思います。

細谷先生回答：「私が参加した社会調査」に見るように、私が最初に取り組んだのは対象者をランダム・サンプリングし、調査票を使う統計的調査でした。この表の中で、日本社会学会のSSM調査は尾高先生や西平重喜先生を中心とする完全に統計的な調査ですが、1955年東北大文社研の「町村合併」調査や1957年からの文社研の「釜石調査」は、住民に対する統計的な意見調査を含みながら、それだけではなく、インフォーマントへの聞き取り調査による、いわゆる構造分析も行われています。つまり、一つの調査プロジェクトの中に今日の社会調査協会の用語でいう量的調査も質的調査も含めてそれらを使い分けながら調査目的を達成しようとする方法をとっていました。だから、私は「調査」とは、社会の実態を如何にして正確に捉えるか、という仕事であって、統計的調査と質的調査の両方を上手に使い分けるのが大切だという認識をもってきました。これは今でも変わりません。だから私の庄内モノグラフでも、インフォーマント・インタビューによる質的調査資料だけでなく、主として官庁統計ではありますが量的な資料をも使っています。ただ主要なエネルギーが質的調査に注がれているのは事実で、その理由は、多数の調査員を使う調査票による統計調査は、教養部など専門学生のいない部局ではなかなかやりにくいこと、またアルバイト代などの費用も掛かること、など、ごく実際的な理由からです。それだけの苦勞をするなら、自分自身、あるいは仲間の数人でできる、インフォーマント・インタビュー調査の方が、労少なくして稔り多いと思ったからです。

「私が参加した社会調査」の表を見て頂ければ分かるように、調査員の学生を集める必要がない、というよりも調査員として学生を使わざるをえない「調査実習」では、私も統計的調査をやりました。むろんサンプル数も少ないし、素朴なレベルのものですが、ちゃんと「統計学的」な有意差の検定などもやりました。私は、別に質的なモノグラフ方法を「選択」したわけではありません。いろいろ調査をやっているうちに、いやでも多数学生を使わざるをえない学部教員ではない私は、「質的なモノグラフ方法」をやるようになってきたのです。ついでにいうならば、菅野さんと田原さんとの質的調査の共同チームが出来たのは、菅野さんが宮教大、田原さんが教育学部の大学教育開放センターという、社会学の専門学生のいない部局にいたということが大いに関わっていたと思います。

統計学的に高度な方法でない科学的でないという人がいるとしたら、そういう人は、そもそも社会学とは人間の行為に対する「意味理解の方法」による認識だという社会学の本質

をどう考えるのでしょうか。むろん統計的調査でないと、量的一般化は出来ません。しかし、統計的調査の数字でも、それをどう「読む」か、となると最終的には意味理解が必要です。質的調査の意味的普遍性の認識と、その点では同じです。違うのはただ、質的調査では、量的一般性を主張してはいけないというだけです。

(3)これも上記と類似の質問ですが、村落研究を長期間にわたって継続する研究者は、あまり多くないように感じております。もちろんそれは、日本社会が近代化と市民社会の形成にともない、封建遺制の問題が相当程度解決され、農村中心から都市中心の社会に変化していったからだとは思いますが。(たとえば、周知のように福武氏も村落研究は1970年代にやめて中国研究、福祉分野へ移り、島崎氏も都市研究へシフトされました。)ですが、細谷先生は、若いころから村落研究を継続されており、都市社会学や環境社会学その他にシフトされなかったのには、どういう要因があったのでしょうか。

たとえば、釜石調査は、細谷先生よりも上の年代である田野崎昭夫先生たちの仕事ということで、世代差の問題、あるいは中央大学と東北大学という場所の問題から、都市や工業地域の研究には入らなかったということもございますか。

学問的な次元での問題意識で考えるとこのあたりをどのように整理されるかを、可能な範囲でお聞きできればと思った次第です。

細谷先生回答：この質問は、いよいよ意味が分かりません。農村調査を継続して悪いのですか。その人の関心で都市や産業に研究テーマを移すのは自由ですし、結構なことだと思います。しかし私がとくに庄内で調査を続行したのは、端的に言って、面白かったからです。学問は面白いからやるのであって、この頃文部省などでよくいう(らしい)役に立つからやるわけではありません。研究の結果が役に立つならば、それはそれで結構なことですが、研究者は、面白くてやっているのです。少なくとも私の知っているまともな(という意味は、ちゃんとした研究をやっているという意味です)研究者は、みな面白いからやっているのです。むろん若い時代、業績を上げないと就職ができないという条件の中で、面白いよりも、認められるような業績を追求するということがあります。私もそうでした。上に紹介した『評論』論文や『思想』論文等はまさにそうです。

農村調査が本当に面白くなったのは、島崎さんから佐藤繁実さんを紹介されて、その案内で、その村では「部落ぐるみの集団栽培」をやっているか、どのような方法でやっているのかを、あちこち聞いて廻った庄内の村々においてでした。「家・村」論とありますが、結果的に家・村のあり方が重要だということが分かったので、その頃「家・村」論などという言葉すら私は意識にありませんでした。

(4)また、先生はご自身の経緯において「[学園紛争よりも]60年安保の経験が大きい」ということをお話されておりました。先生の農民意識研究が、安保で「動かない農民」の研究か

ら入られたということで、こういう当時の時代状況・実践的課題と深く関連することが理解できました。こうした時代状況と、その後には亘って農村調査を継続されてきたこととの関係性について、もし影響を与えたほかの出来事等がございましたら、お聞きしたいと思います。

細谷先生回答：日本社会の民主化ということが戦後日本の社会学者の中心的な問題関心になっていたのは先に述べた通りです。戦時中の苛酷な軍国主義体制からようやく逃れることができ、私よりちょっと上の方々からすればようやく生き延びることが出来たという状況で、それは命に関わる課題であったのです。

私の研究が「動かない農民」から入ったなどと前にいいましたかね。この表現は、いささか思い込みすぎるように感じますが、先に述べたような意味で、日本社会民主化の課題を意識しながら、60年安保闘争を闘った世代からすると「動かない農民」がじれったかったことは事実です。それで東北大でも院生会が農民意識調査をやって見たりしたわけです。しかしこれは結局成果なく終わり生きましたが。それと調査を継続してきたこととの関係と聞かれても、どういうことを聞きたいのか、私には理解できません。先にのべたように、「面白かったから」としかいいようがありません。

(5)これと関連して、先生の農村研究において、佐藤繁実氏の存在がかなり大きくかかわっていると理解すべきと考えるようになりました。つまり、単なるインフォーマント以上に、佐藤氏の存在は先生の研究歴を考えるうえで大きな要因ではないかと、前回の先生のお話を聞いて感じた次第です。この点について、さらにご教示いただければありがたく存じます。

細谷先生回答：前回のこの会合でお話ししましたように、佐藤繁実さんにお世話になったことは、私の農村調査研究にとって、決定的といってもいいほど、大きかったと思っています。なかでも、記憶のなかに強く印象づけられているのは『村研ジャーナル』第46号の「庄内モノグラフ調査をめぐって」で紹介したことがあります。部落の合議制は民主主義本来の要素を含むものだ」という言葉です。庄内調査を長く続けるうちに、私もこのことの意味を理解できるようになりました。繁実さんについてのお話は、本来なら、菅野さん、田原さんと一緒にすればいろいろ思い出も出てきて実のあるものになるのですが、今日は私が代表になって編集した「追悼文集」（※細谷編集代表『佐藤繁実先生追悼文集』1997年）のコピーを持ってきましたので、これをご覧頂ければ、繁実さんが如何に幅広い活動をした人か、ご理解いただけたと思います。日本人寄稿者の中には、村研メンバーもたくさん含まれています。

(6) 地域社会学会と村研の関係について、先生はどのように捉えられているのかをお伺いし

たく思います。細谷先生は地域社会学会創設時の会員ですが、村研のような参加のされ方はされていなかったように思います。先生の研究にとって、「ムラ」ではなく、「地域社会」という分析枠組みはどのように捉えられていたのでしょうか。

また、最近のご研究では「地方」という枠組みを出されていますが、これは「地域社会」という枠組みとは異なる含意があるのでしょうか。

細谷先生回答：地域社会学会には、私は島崎さんに誘われて、その発足時からの会員です。発起人だったかもしれません。どう思っているかと問われると困るのですが、村研とはまた別に、都市や村落も含む「地域社会」の研究学会として発展している様子、何よりです。「地域社会」という分析枠組みといわれても困りますが、それは地域社会学会の方で御考えになることでしょう。私は、都市と農村との両方を含めて言う時に使うのに便利だから使っているという程度です。

私が、「方法としての地方」ということを述べたのは、「庄内地方」に関してでした。「庄内地方」という言葉は日常的にも普通に使われていますが、要するに旧庄内藩領です。個別の家（経営主体としての家族）や村（旧村つまり部落）を場に、研究主題に関して何故、如何にしてという因果連関を追求しても、もう一つ追求し切れないことがあるのではないかと。因果連関を追い詰めるには範囲が狭すぎることがあるのではないかと。その意味では、諸要因の自然的、歴史的、文化的・社会的連関の共通性があるそれらが絡み合っているような、もう少し広い範囲に視野をひろげた方が、連関を追い詰めることが出来るのではないかと、という意味でそのように述べました。「庄内」という「地方」は、ちょうどそのような範囲になっているのではないかと、思うのです。しかしむろん、庄内という範囲でも川北と川南では、城下町の鶴岡中心と港町酒田中心の違いはあって、ずいぶん住民の気質も、社会・文化も違います。にも関わらず山形県内でも村山や最上、置賜とは違って、一つの特徴あるまとまりをなしていますので、庄内地方という日常用語を研究の一つの地域的範囲として区切ることが、十分に意味があるのではないかと、考えたわけです。そういう「地方」は、日本中各地にあると思いますし、また国際的にも、例えば中国では、日本よりずっと広大ですが、長江を挟んで江北と江南とでは、たしかにそういう違いと纏まりがあるように思いますが如何でしょうか。日本的表現になるかもしれませんが、水田と麦畑の世界の対比です。

(7) 庄内調査では、村落研究の伝統的手法である村落調査(事例調査)が利用されています。さらに加えて、近隣の複数村落の調査も実施されていますが、これまでの先行研究では、同じ地域内の複数地点の調査はきわめて少なかったように思います。こうした調査方法を採用されたきっかけや経緯、趣旨などご教示下さい。また、そうしたお考えは、「方法としての地方」という着想にも発展しているように思われますので、そうした研究構想との関わりについてもご教示下さい。

細谷先生回答：ご質問を頂くほど堅苦しく考えて複数村落を歩いたわけではありません。前にもいったように、佐藤繁実さんからあそこに行ってご覧、面白いよ、といわれてあちこち歩いただけです。それが結果的に、庄内という一つの「地方」を見る結果になったということです。ただし北平田だけは、かつて塚本さん中心の農民意識調査で歩いて、戦後青年運動などの活発だったところで、面白そうだから行って見ませんか、と菅野さん、田原さんを誘ったのは私だったと記憶しています。

(8)庄内調査は、一面では、定住社会としての家と村を実証的に浮き彫りにしてきたように思います。ただし、『家と村の社会学』の事例のなかには、激しく入れ替わる年雇、各地を転々とする次三男、酒田に定着した町人等の人口流入など多くの移動の事例も見受けられます。先生にとって、定住と移動の関係はいかにつながっているのでしょうか。

以前も同様の質問をして、「流入者と他出者の問題は、その地方の特質を示す形で取り上げられれば、組み込める」とご指摘いただき、流入者は、「村における家の新設の問題」、他出者は「家や村の構造と機能」との関わりが重要であることを示唆していただきました（村研の書評に対するご回答）。そのうえで、村外から来ていた若勢のような一時滞在者や奉公人、村と町・都市との関わり、あるいは庄内諸村落と出稼ぎ、移民との関わりについて、お考えがありましたらぜひご教示下さい。

細谷先生回答：定住社会としての家と村、そこを行き来する若勢、あるいは臨時雇いの人たち、という問題は、確かに極めて興味深い、重要な課題と思いますが、私はそこまで手が回らずに終わっています。時代的にも私が庄内を歩いたのは、若勢はいなくなっていた時期でした。しかし、この年雇経験を持つ人びとを対象に、阿部友香さんが調査研究に取り組んでおられるようで、期待をもって見守っているところです。

(9)細谷先生ご自身は、近年、日記の分析という個人の視点から研究を進めていらっしゃいますが、これまで村研では村落構造の分析が主たる方法であり、個人の視点から見るといえるのは、中野卓先生たち以外にはあまりいなかったように思うのですが、中野先生の方法について、細谷先生は村落研究としてはどのように見ていたのでしょうか。

細谷先生回答：阿部太一日記の扱いを「個人の視点」といわれますが、近年の社会学一部若手の「わたくし物語」、「ともだち物語」とは違うと思います。そこには、社会があり、生活があります。

中野卓さんの研究とは、『村落社会研究』第4集(1968年)の「大正期前後にわたる漁村社会の構造変化とその推進力」をさしておられるのでしょうか。この研究は、漁村におけるリーダーの果たした役割を中心に分析している見事なモノグラフで、興味深く読んでいましたが、阿部太一日記を扱った時に、この論文が念頭にあったわけではありません。あるいは、

ご質問は『村落社会研究』第19集の「村と生活史」を念頭においておられるのでしょうか。確かに後者は「個人生活史」から「村を逆照射」という「方法論」について述べていて、阿部太一日記の方法と大きく重なり合いそうです。そういう意味で、あらためてこの中野論文に注目して自分の阿部太一日記研究を反省してみることは有意義かと思いますが、私はそこ迄考えて阿部太一日記を取り上げたわけではありませんでした。これらの中野卓論文は、日本社会学の中で充分に取り上げられて来なかった漁村の実証研究としてまことに優れたものとして、読み継がれるべき、あるいは継承されるべき論文として、重視しています。

(10)今後の村落（農村）社会学の方向、あるいは学史研究について、先生のお考え（今後重視すべきと思われるテーマや、現状に危惧されていること）をお聞きできればありがたいと思います。（前回は学史研究にあたって、学問の自由のない中で慎重に言葉を選びながら表現せざるをえなかった問題や、新明先生の公職追放の問題などをご教示いただきました。また、先生は「村研アーカイブス」の問題提起もされており、その関連でもご教示いただければ幸いです。）

細谷先生回答：私が今考えているのは、「村と町」という課題です。農村社会学では、人びとは家に属し、その家は同族団あるいは村に連合して、外部社会とは隔絶した生活を送っているもののように想定され、あるいはそのような対象地が好んで選択される傾向があったのではないかとおもいます。しかし、実際は、まことに密接な関係が村と町にはあったのではないか。そのことによって、村と町それぞれの生活が成り立っていたのではないかと思うのです。つまり、町を訪問する村人、村人の来訪を待つ町、という研究主題です。

付録 関連する資料

聞き取りに際して細谷先生から、「学部生・院生時代の勉強ノート」「私が参加した社会調査改訂版」「私が参加した中国農村調査」「私が参加した社会調査」改訂版によせて一村研と漁村研究」を頂戴した。ここに関連する資料として掲載する(編者)。

「私が参加した社会調査」改訂版によせて一村研と漁村研究

細谷 昂

先日お渡しした「私が参加した社会調査」の改訂版を作りました。主要な改訂は、1960年の「^{よりいそ}寄磯調査」を追加したことです。このことについては記憶にありながら何時のことだったか、資料がなく記すことが出来ませんでした。ある日記帳(らしきノート)の記録によって年月日が分かりました。1960年の1月のことです。記録によると、エズラ・ボーゲルの依頼で東北大学の社会学関係者が宮城県内の漁村を歩いたようです。私は牡鹿半島の「寄磯」の担当でした。この班のメンバーは、「吉田、佐藤、細谷」ですが、打合会などの人名で、田野崎、田原の名前が出て来るのでおそらく他の地域に行った班もあったのでしょうか。ボーゲルから依頼を受けたのが誰か分かりませんが、この顔ぶれから見ると田原さんでしょうか。この調査の資料によって書かれた論文については、私は知りません。ボーゲルの著作を調べれば出て来るのでしょうか。

この調査行の記憶に触発されて、私の漁村調査を振り返ってみると、青森県の金浜村もあり、またぼんやりした記憶では釜石調査の一環で、近郊の嬉石(私の記憶では「うれいし」ですが、ネットで見ると「うれいし」となっています)という海沿いの集落を訪ねたこともありました。いずれも農村とはまた違って、それぞれ大変に面白かった記憶があります。

寄磯では、調査票を持って「網主」と聞いた一軒の家をたずねたところ、囲炉裏端に数人の若い女性がそれぞれに赤ちゃんを抱いて座っていました。初めは近所のお嫁さんたちが集まって世間話をしているのかと思いましたが、面接をして行くとその数人の女性は皆この家のお嫁さんだということが分かってびっくりしたことがあります。つまり今思えば、おそらく「網主」とは定置網の経営主で、かなりの労働力があるので、後継者一人だけでなく、おそらくは次三男にも嫁をとって同居させ、定置網の仕事をさせていたのだらうと思います。そういえば、他の家での面接では、定置網は複数の家が網主になっていて、それらの家の人たちが協力して一統の網を経営しているようでした。

その前年、1959年に訪問した岩手県八戸市の海沿い金浜では、本家といわれる家の周りはやや開けているものの、その他の4~50軒ほどの家は海沿いの松等の林の中に散在している集落でした。その本家を訪ねていろいろお話をうかがっていたところ、屋敷内の大きな木造の倉を見せてくれて、数年前までは、そこに分家のすべての家々が一年は食べられるだけの穀物を貯えていたものだという話を聞いて、驚いた記憶があります。いわしの刺し網などの漁業が中心で、田や畑は狭小、しかも冷涼な気候で農作物には適さず、穀物は稗が中心

という自然環境のなかで、漁業労働力を提供する分家に本家が生活保証している状況がうかがわれました。

寄磯の事例は初期の有賀先生の用語でいえば「大家族形態」ということになるでしょうし、また、金浜の事例は、有賀先生が及川宏さんの「考えの正しさをうけ入れ」て「同族団」と呼んだ社会形態に当たるといえるでしょう（『有賀喜左衛門著作集』Ⅰ、3ページ）。ですから、これら二つの事例をもっとつっこんで調査を継続すれば、面白いモノグラフができたと思います。

しかし、「私が参加した社会調査」の表を見て頂ければ分かるように、私の漁村調査は、これ以上展開しないで、農村調査に集中してゆくこととなります。それは何故か、という質問があるでしょうが、その一つは、極めて単純で、当時の交通事情にあるといえるでしょう。同じ宮城県内にある寄磯でも、当時のメモによると、午前中に仙台から仙石線電車に乗って、石巻で石巻線の「キハ（気動車）」に乗り換え、女川に着いてから、一日一回の午後2時発の舟に乗って、寄磯着は午後3時という状況でした。しかし「陸路のないところゆえ、どんな辺地かと思ったら、人々の服装など modern なのにおどろく」と書いています。が、そういう交通事情でしたから、よほどテーマを確定して、調査計画を立てて行くのでなければ、そう簡単に漁村調査は出来ない状況だったのです。有賀先生の石神調査が、昭和10年の初めての訪問以来、翌年機会を得て雪深い中を訪問した後は、現地との「文書の往来」によって情報の収集が進められたというのも、当時の交通事情からして当然のことだったと思います。東京から盛岡まで新幹線が通り、また随時自動車を利用可能という現在の状況からではなかなか実感は困難でしょう（『有賀喜左衛門著作集』Ⅲ、19～21ページ）。

ここで漁村に関する村研の研究状況について見ると、塙書房版の『村落社会研究』第三集(1967年)と第五集(1969年)、第六集(1970年)には、愛知大学の後藤和夫さん、牧野由朗さんが志摩漁村についての調査研究を掲載しており、第二集と第三集には柿崎京一さんが東京湾岸の村落についてのモノグラフを、また中野卓さんが、第四集(1968年)に石川県漁村のモノグラフを発表し、さらに第八集(1972年)に、対馬・能登の漁村の事例によりながら「村落社会の一研究方法」を論じています。村研としても漁村研究がかなり盛んだったことが分かります。しかし、これら塙書房版から御茶の水書房へと出版社が移る頃、つまり第十一集(1975年)頃から漁村研究はほとんど顔を出さなくなります。

しかし、農村に較べて漁村の調査研究が少なかったのは、中野さんが『村落社会研究』第八集に「村落社会の一研究方法」を寄稿している時にすでに、「農村研究は当時盛んだったが、漁村を研究する人は社会学にはあまりにも乏しい」(120ページ)と書かなければならなかったことから見ても、全国的な状況だったのでありましょう。そこにはやはり、「九学会連合共同調査期間が終わると、それ以上には、遠隔のこの村を訪ねることも私にはできず」(上掲論文)というような事情があったようでもあります。そういえば、愛知大学に漁村研究が盛んだったのは、川越淳二さんを始めとする愛知大学の研究者の個人的関心や努力に加えて、大学の対象地への地の利、それに伴う研究機関としての研究関心があったことも否定

できないと思います。牧野由朗さんが「簡単な比喩」として述べておられるように、都市の大学に勤務している多くの社会学研究者にとって、「漁村へのアプローチは、陸づたいに車で行くのではなく、舟に乗って地先の海から入らなければならない」ことの困難が立ちほだかっていたのです（牧野由朗編『志摩の漁村』、愛知大学総合郷土研究所研究叢書 9、名著出版、324 ページ）。

しかし、それだけでしょうか。「村研」つまり村落の研究を主眼とする学会から見て、「漁村」そのものが次第に姿を変えて行ったこともあったのではないのでしょうか。この点、竹内利美先生の村研初期の論文が、そのあたりの事情をよく示していると思います。すなわち、竹内先生の「漁業と村落」（村落社会研究会『村落社会研究会年報』Ⅲ（村落共同体の構造分析）、時潮社、1956年）は、「三陸漁村の事例」によりながら、1955(昭和30)年前後の頃にすでに、孫分家の地位にあり伝統的な家格では惣本家に劣るながら、遠洋漁業に取り組むことによって「立浜の天皇」といわれるような支配的地位に立つB家、他方経済的にはそれに劣るが、伝統的な生活慣習の点ではその上に立つA家など定置網と漁船を持つ家々と、他方、これらの家に雇傭されることによって生計を立てる家々と、村の漁民層は「経営者と労働者の両層に、かなり明確に分化」し、「居住の場と職場との分離」が進んでいた。が、しかし「家族生活その他の面では、なお緊密に関連し補足し合いつつ、村落生活の基盤をなし」ていました。このような状況のなかで、集落の全戸による「契約講」も維持され、確かに村落といってよい社会形態をなしてはいたが、しかし「主業たる遠洋漁業は全くこれと分離している。漁場や漁船漁具は全くその制約外にあり、職場も隔絶している」。このように、遠洋漁業に進出するにつれて、「農地」を基盤とする農業・農村などとはかなり質の違った点が見られるようになっていたのです（竹内利美、上掲論文、138～139、143、159、165 ページ）。

村研会員の研究で、漁村への取り組みが少なくなっていたについては、地理的な困難の他に、このような漁村そのものの変化があったと見る事が出来るでしょう。しかしその後、村研年報が農山漁村文化協会版に変わってからも、佐藤康行さんの佐渡漁村の調査、佐藤直由さんと内田司さんの牡鹿半島漁村の調査研究（『村落社会研究』第24集、1988年）や、また光吉利之さんや後藤和夫さんなどの「農漁村における家族の変容」（『村落社会研究』第25集、1989年）なども発表されています。

ところがそれから20年余りたって、東日本大震災では、津波によって漁村が深刻な被害を受け、それに原発事故が追い討ちをかけるなかで、村研会員を含む多くの研究者によって、漁村の調査研究が行われています（一例として、『年報村落社会研究』第51集（災害と村落）、農山漁村文化協会、2015年。歴史家等の業績として、岩本由輝編著『歴史としての東日本大震災一口碑伝承をおろそかにするなかれ—』刀水書房、2013年）。断続的ながらこれまで紹介してきたような漁村研究の歴史を持つ村研会員としては、一時的な災害報告を超えて、その土地の家、村の状況、それと災害及びその復興との関連について、明らかにして頂きたいと思います。

追記（2020年12月 細谷昂）

ご質問の中に、しばしば質問の意味が分からないといって、要するに「面白い」ことだ、などと一見無責任なような発言をしています。それはおそらく以下のようなことなのでしょう。

私への質問ですから当然ともいえますが、質問でしばしば出て来ているのは、私の問題意識、調査の主題設定についての「なぜ」、あるいは私が学んだ先生からの影響の問題です。しかし社会調査とは、とくにモノグラフ調査とは、調査をする研究者と、対象者あるいは対象地との相互作用です。もっと日常用語でいえば、「出会い」だと思います。

私の場合は、庄内農村と私との「出会い」であったわけです。今回の聞き取り資料のなかに、その媒介者である佐藤繁実さんのことがちょっとだけ出て来ますが、圧倒的に多いのは、私という研究者の側、農村社会学の側、大学の側のことがらです。つまり、出会いの一方だけに目がいつているわけです。

しかし、例えば『家と村の社会学』など、私の農村社会学の著作を見て下さい。いろいろ質問したり資料を集めたりしているのは研究者である私ですが、その私に答えてくれたり、資料を提供してくれているのは、庄内の農家の方々です。「農村の嫁は角のない牛」といったのは（153 ページ）、私ではありません。私という研究者が「ジェンダー」の観点からそう論じているのではなく、庄内農村の青年たちがそう主張しているのです。あるいは、戦時期の交換分合と自作農創設を組み合わせるという知恵を発揮したのは、庄内の農民たちです。このことについて私に教えてくれたのは北平田の中野曾根部落の実行組合長としてその実務に携わった、佐藤喜三郎という人でした（858 ページ以下）。部落の田圃一枚一枚を思い出しながら、それらの所持者、耕作者の間での交換について語ってくれました。部落文書はありましたが、その文書が語る意味を理解できたのは、この人の説明があったからです。むろん私が質問しなければ、この貴重な歴史的事実は喜三郎さんの頭の中に眠ったまま、だれにも知られずに失われたでしょう。そこに研究者である私の関与があったのですが、しかし交換分合と自作農創設を組み合わせるという知恵を思いついて実行したのは、庄内の農民たちで、研究者ではありません。ここに、喜三郎さんと私との「出会い」があったわけです。

この聞き取りの中で、「研究は面白いからやる」のだなどと無責任なような発言をしています。モノグラフ調査研究の場合、このような対象地、対象者との「出会い」のなかで醸し出される「面白さ」が決定的に重要なのだと思います。

記載年次	表紙表題	署名	内容
なし	マンハイム 社会学の現代的課題 K.Mannheim, Die Gegenwartsaufgabe der Soziologie.		この文献の抜き書き、日本語訳及びコメント
1961.1～	なし	なし	European Ideologies: A Survey of 20th Century political Ideas, edited by Felix Gross, (Philosophical Library, Inc. New York, F. Hubner & Co., Inc. New York, 1948.)抜き書き (英文)、Theodor M. Newcom, Social Psychology (Travistock Publication Ltd. London, 1952)の抜き書き、日本語訳。
なし	Die Wissensformen und die Gesellschaft von Max Scheler	社会学科細谷昂	この文献の抜き書き、日本語訳及びコメント
なし	社会学ノート T. Parsons, & others, Toward a General Theory of Action.	なし	この文献の抜き書き、日本語訳
なし	インテリゲンチヤの問題	細谷昂	この問題に関する草稿。著者不明の文献の抜き書き(おそらくは原文英文)。R. Michers, "Intellectualus", in Seligman's Encyclopaedia of Social Science, Bd.VII. C.Wright Mills, White Coller—The American Middle Class— (ミルズ・杉政孝訳『ホワイト・カラー』創元社)、R.K.Merton, Social Theory and Social Structure, Chap.VII. これらの文献の抜き書き、日本語訳。
1961.11～	社会学ノート 農業と農民	細谷昂	綿谷尠夫「農地改革後の自作農の性格—鈴木教授および栗原氏の農業理論によせて—」(『農業総合研究』第6巻第2号、昭和27年)。綿谷尠夫「農家の社会的性格と階層の分化」(『農業総合研究』第12巻第3号、昭和33年)。

注) 念のため私の学歴を書いておきますと、1953年4月東北大学文学部入学(教養部)、1955年4月東北大学大学院文学研究科修士課程入学、1959年4月東北大学大学院文学研究科博士課程進学、同年3月同課程単位取得退学・東北福祉大学講師です。東北大学文学部・文学研究科では、新明正道先生が主宰する社会学研究室の所属でした。

私が参加した社会調査改訂版（1966年以降の庄内モノグラフ調査については省略。『村落社会研究ジャーナル』No. 46、2017年、を参照されたい）						
年次	調査主体	調査課題	対象地・対象者	細谷の参加様態	文献	
1955	東北大文社研（新明正道、佐々木徹郎、佐々木交寛、長谷川精一、森博、他）	町村合併	白石市（旧福岡村）	質問紙の調査員	『社会学研究』第11号「特集町村合併と地域社会」1956、東北社会学研究会	
1955	日本社会学会調査委員会（SSM調査）	社会的成層と移動	仙台市労働者住宅街	質問紙の調査員	富永健一『日本の階層構造』1979、東大出版会	
1957～	東北大文社研（新明・田野崎昭夫・鈴木広・小山陽一・吉田裕・細谷他）	産都市の構造分析	岩手県釜石市	面接調査	『社会学研究』第17号「特集産都市の構造分析」1959、東北社会学研究会	
1959	東北大文社研（？小山陽一・細谷）	臨海工業都市、漁村	青森県八戸市、金浜	面接調査	漁家、漁村というものへの初めての認識。	
1959	東北放送調査部・東北マスコミュニケーション研究会・東北大放送研究部（細谷）効果	ラジオテレビの広告	仙台市内テレビ所有世帯	企画・調査票作成・実施	東北大放送研究部「ラジオテレビと主婦」『放送研究』（調査特集号） 東北放送調査室調査部「東北放送のラジオ・テレビにおける広告効果測定」（調査シリーズ92号）	
1960.1	エズラ・ヴォーゲル（田原音和・田野崎昭夫・吉田裕・佐藤勉・細谷）	漁家の家族、意識	宮城県牡鹿町寄磯	質問紙の調査員	公刊報告書なし（おそらくは依頼者のエズラ・ヴォーゲルに送付）。漁家、漁村というものへの初めての認識。	
1960	東北大学教社研（竹内利美、佐々木徹郎・菅野正・江馬成也・細谷）	東北農村における新機能集団	岩手県西根村田頭	面接調査	菅野正「農政の浸透と村落体制」、竹内利美編『東北農村の社会変動』東京大学出版会、1963、東大出版会	
1960	東北大学教社研（竹内利美、江馬成也・森博・細谷）	同上	福島県梁川町粟野	面接調査	江馬成也・森博「青年連盟の消長と村落体制」、竹内利美編、上掲書	
1960	東北大学教社研（竹内利美・塚本哲人・佐藤勉・細谷・佐藤信一・北森義明・外田忠雄）	同上	山形県庄内地方酒田市北平田地区	調査票作成・実施	塚本哲人「水田単作地帯農村における新集団の展開」 竹内利美編、上掲書	
1960	東北大文社研（院生有志、細谷他）	労働組合員意識	東北放送労働組合	企画・調査票作成・実施	細谷昂「農民意識の変容と停滞」（上・下）、『思想』岩波書店、1962年4月、1963年1月	
1960	東北大農村問題研究会（院生会有志、農研・経済東敏雄・文細谷）	農民の政治意識（「安保闘争」を承けて）	宮城県南方村	企画・調査票作成	調査報告書まではまとまらなかったのではないか。	
1961	東北大（塚本哲人・田原音和・勝又猛・細谷）	農民とマスコミ	宮城県内農業集落	企画・調査票作成・実施	『東北農民とマス・コミュニケーション』1960、自主出版	

年次	調査主体	調査課題	対象地・対象者	細谷の参加形態	文献
1961	東北福祉大社会調査実習（森、細谷）	主婦の生活と意見	仙台市内	企画・調査票作成 ・指導	
1962	東北福祉大社会調査実習（細谷）	農民の生活と意見	仙台市七郷	企画・調査票作成 ・指導	
1962	福島大社会学研・県選挙管理委員会（菅野正・細谷）	政治意識・世論調査	福島県喜久田村、石川町、梁川町	企画・調査票作成 ・実施	「福島県における政治意識に関する世論調査結果」 福島県選挙管理委員会、1963年
1962	東北経済圏市場調査委員会（木下彰・竹内利美・佐々木徹郎・江馬成也・勝又猛 斎藤吉雄・五十嵐之雄・森博・佐々木交賢・星永俊・藤井黎・細谷・雪江・塚本）	東芝・味の素など32社についての市場調査	東北六県・都市農村各地	企画・調査票作成 ・実施	木下彰・竹内利美・吉田震太郎・塚本哲人「東北経済の特質と市場性」、『東北放送』1963年5月号、東北放送株式会社。
1963	福島大・県選挙管理委員会（菅野正・斎藤吉雄・五十嵐之雄・細谷）	地方選挙の実態	郡山市・信夫村・小川町	企画・調査票作成 ・実施	「地方選挙の実態」福島県選挙管理委員会、1963年
1964	対島貞夫・細谷	大学生の生活と意見	東北大、福島県立医大 岩手大、新潟大、広島大学生	企画・調査票作成	対島貞夫・細谷「大学教養課程学生の生活と意見に関する調査報告書」『教養部紀要』第8号（別冊）
1964	東北福祉大社会調査実習（小山陽一、五十嵐之雄、細谷）	農家の生活とマス・コミ	宮城県宮城町芋沢・熊ヶ根、吾地	企画・調査票作成 ・実施	
1964	東北福祉大社会調査実習（小山、五十嵐、細谷）	農民の生活と意見？	宮城県宮城町	企画・調査票作成 ・指導	
1964	東北大文社研（小山陽一、細谷、八木正、樋口辰子、守屋孝彦、中江好男）	労働組合分裂	七十七銀行従業員組合	企画・調査票作成 ・実施	調査報告書は作成せず、組合員の自己認識として実施されたものである。
1964	マスコミ研究会（田原音和、森博、細谷五十嵐之雄・小山陽一）	農民とマスコミコミュニケーション	宮城県宮城町、古川市富永、宮城町	企画・調査票作成 ・実施	「農民とマス・コミュニケーション」『放送学研究』14、日本放送協会放送文化研究所、1967
1965	東北福祉大社会調査実習（細谷、五十嵐之雄、雪江美久）	稲作農業の変化と農民層の動向	宮城県古川市高倉	企画・調査票作成 ・指導	細谷貞夫・五十嵐之雄・雪江美久「農民層分解と『いえ』の姿容」『東北福祉大論叢』第7巻、1968年
1965	村落社会研究会メンバーによる視察	水稲集団栽培の実態	愛知県豊橋市御津農協	面接	報告作成まではいならず、認識をえたのみ。

調査主体	調査主体	調査課題	対象地・対象者	細谷の参加形態	文献
1966	東北福祉大社会調査実習（細谷、五十嵐之雄、樋口晟子、雪江美久）	現代都市家族	仙台市内五橋、三条、郡山、七郷	企画・調査票作成・指導	
1966	細谷（むのたけ）氏紹介	農村労働組合	秋田県羽後町	企画・実施	
1967	東北福祉大社会調査実習（田代国次郎、樋口晟子、五十嵐之雄、細谷、雪江）	都市家族における老人問題	仙台市五橋、八幡、南材、宮城野、高砂	企画・調査票作成・指導	農村労働組合というものへの初めての認識。
1968	東北福祉大社会調査実習（田代国次郎、樋口晟子、武永、細谷）	農業の構造改善と農民生活の近代化	宮城県泉町根白石、福岡	企画・調査票作成・指導	
1968	東北大学教養部社会学研（対馬、森、細谷）	ホワイトカラーの生活意識	富士製鉄釜石製鉄所、名古屋製鉄所	企画、実施	
1969	東北大コミュニティ研究会（斎藤吉雄、佐藤守、佐藤勉、森博、細谷他）	過疎地域におけるコミュニケーション再編	秋田県田代町、岩手県沢内村	研究会参加	斎藤吉雄「『集落再編』と住民の対応」『社会学研究』第31・32号、1972年
1969	東北福祉大社会調査実習（細谷・樋口・北村翼）	共稼ぎ家族と婦人労働	仙台市内	企画・調査票作成・指導	
1970	東北福祉大社会調査実習（樋口・細谷・北村）	稲作農業の現状と農民の対応	宮城県栗原郡志波姫町	企画・調査票作成・指導	樋口・細谷・北村「『減反農政』下の農民の対応」『東北福祉大学論叢』第10巻、1971年
1971	宮教大社会学実習（菅野正・細谷・多々良翼）	都市住民の政治意識と投票行動	仙台市内	企画・調査票作成・指導	
1971	菅野正・田原音和・細谷・多々良翼	稲作地帯、庄内との比較、請負耕作	新潟県岩室村	企画・実施	
1972	宮教大社会学実習（菅野正・細谷）	近郊農業の変化と農家生活	仙台市柳生	企画・調査票作成・指導	
1975	菅野正・田原音和・細谷・多々良翼	稲作地帯、庄内との比較、請負耕作	新潟県岩室村	企画・実施	
1978	東北宮城県沖地震災害調査研究会（細谷・佐藤俊昭・藤山嘉夫・佐藤直由・小林一穂）	宮城県沖地震負傷者行動調査	仙台市内	企画・調査票作成・実施	細谷・佐藤俊昭「『都市化』と被震負傷」東北大『教養部紀要』第31号、1979年 藤山嘉夫・佐藤直由・小林一穂「地震時における負傷者の行動」『社会学研究』38、1979年

年次	調査主体	調査課題	対象地・対象者	細谷の参加様態	文献
1993～	中国河北省社会科学学院（細谷・菅野正・中島信博・不破和彦・小林一穂・藤山嘉夫・佐藤繁実）	中国農村における「一子政策」と高齢者問題	中国河北省新豊頭郷新豊頭村	企画・実施	細谷昂・菅野正・中島信博・小林一穂・藤山嘉夫・不破和彦・牛鳳瑞『沸騰する中国農村』御茶の水書房、1997年
1994	細谷・？	生産組織	宮城県志波姫町	面接調査	
1995	細谷・北村學・中島信博・小林一穂・秋葉節夫・伊藤勇・永井彰・徳川直人・加藤眞義・水上英徳	「中間」地域の形成と発展に関する実証的研究	山形県庄内地方、北海道道十勝・根釧地方	企画・面接調査	細谷昂「『中間』地域の形成と発展に関する実証的研究」（科研費報告書）1997年
1996	細谷・小林一穂・水上英徳・山田佳奈・徳川直人	同上科研費調査の一環か？	北海道十勝・根釧地方	企画・面接調査	
1996	沖縄県概況調査（細谷・？）	沖縄農村の概況調査	佐敷町、今帰仁村	企画・面接調査	これら沖縄農村の調査は、本州農村との比較検討のために実施されたが、論文執筆には至らなかった。
1997	沖縄県石垣島、竹富島（細谷・中島信博・小林一穂）	沖縄稲作地調査（2期作）	石垣市・竹富町・西表島	企画・面接調査	これら沖縄農村の調査は、本州農村との比較検討のために実施されたが、論文執筆には至らなかった。
1997	細谷・劉文静	院生の博論調査	宮城県名取市	企画・面接調査・指導	
1999	細谷・小林一穂・佐藤利明・徳川直人・劉文静・阿部晃士・山田佳奈	「転換期」における農村社会の変容と農民の対応	山形県庄内地方、沖縄県石垣市、北海道別海町・浜中町	企画・面接調査	細谷「『転換期』における農村社会の変容と農民の対応」（科研費報告書）2001年
1999	細谷・山田佳奈・劉文静	産地直売活動	岩手県一関市・千厩町・大東町	企画・面接調査	
1999	細谷・徳川・山田佳奈	沖縄農業（稲作・砂精黍など）。	石垣市・竹富町・宮古市・城辺町		これら沖縄農村の調査は、本州農村との比較検討のために実施されたが、論文執筆には至らなかった。
2000	細谷・中島信博・劉文静・丹治祥子	ブラジル日本人移民	ブラジル日本人移住地	企画・実施	細谷「ブラジル日本移民の生活と意識」岩手県立大総合政策学部ワーキングペーパーシリーズNo11、2002年
2002～	河北省社会科学学院（細谷・佐藤利明・吉野英岐・劉文静・小林一穂）	アジア地域の変容に対応する地域整備と環境保全に関する比較研究	中国河北省新豊頭郷新豊頭村	企画・実施	細谷・吉野英岐・佐藤利明・劉文静・小林一穂・穂興増・劉増玉『再訪・沸騰する中国農村』御茶の水書房、2005年
		・中国班			

以上その他、2001年から2004年まで、岩手県立大学の地域調査実習、専門演習、卒論指導、中国人研究者の視察案内などとして、岩手県内各地（平泉町、東和町、陸前高田、野田村、滝沢村、西根町、東北農業センター、二戸町、ヶ崎町など）において、予備的な面接調査を行っている。	細谷・佐藤香奈「グリーンツーリズムと地域活性化」、岩手県立大『総合政策』第7巻1号、2005年。 細谷・小野寺敦子「農産物直売所によって成功とは何か」『総合政策』2006年。 これら2論文は、総合政策学部学生の卒業論文であるが、とくに優れたものとして、指導教授の細谷と連名で学部機関誌に掲載された。
以上において、特徴的な点。	
(1)1950年代から60年代初期は、まだ調査会社がとっており、大学にマーケットリサーチ、広告効果測定等の調査が依頼されており、それに大学側も対応していること。	
(2)各大学において社会調査実習が取り組まれており、社会調査というものの、おそらくは社会的関心が深く、それに関連する調査が行なわれていること。	
(3)1950年代初めのテレビ開局の影響が、マスコミへの関心が深く、しばしば関連する調査が行なわれていること。	
(4)私個人についていうと、学部学生の頃は、文学部社会学研究室が主催して行った町村合併調査や釜石調査、あるいは依頼によつたとと思われるSSM調査等、質問紙調査の調査員を務めており、それによって社会調査というものの訓練を受けていること。	
(5)大学の社会調査実習の担当教員を引き受けていることが、指導の立場からなら、社会調査の技法を身につけることになっていること。	
(6)これらの社会調査は、それぞれ異なる調査主体、調査目的によるものであったから、調査内容、調査対象もさまざまであり、佐藤繁実氏との出会いで庄内に「入り浸る」ようになるのは、1967年以降である。そして1970年以降、菅野正、田原音和面先輩との共同調査が始まる（『村研ジャーナル』No.46参照）。	
(7)その後、日本国内の稲作地への訪問が始まるが、蒲原は、庄内の集団栽培に対して請負耕作の進行という点から、佐賀は、庄内の大河川の沖積地に対して有明海の干拓地稲作との比較という観点から、砺波は、集村が優勢な庄内に対して散居村とは異なるものかを知るために、それぞれ探訪したのであった。	
(8)外国に関しては、アメリカ・カリフォルニアの大規模稲作農場に対する認識、ブラジルの日本人入植地の特質認識のために探訪した。そのほか、村研、メンバーの団の一員としてヨーロッパの山村訪問にも参加したが、調査というまでには至らない視察程度であったので、ここにはとくに記さなかった。	
(9)また、漁村については1959～60年頃、大学院学生時代に岩手県金浜、宮城県岩巻などに調査に行っており、きわめて興味深かった記憶があるが、その後継続展開することはなかった。	
(10)外国農村について、モノグラフ調査ともいいうる長期かつ繰り返しの調査行を実施することができたのは、1988年以降、やはり佐藤繁実氏の仲介で中国北部河北省においてであるが、この表には詳細は記載せずに別表を作成することにする。	
注：表中、「東北大文社研」とは東北大学文学部社会学研究室、「東北大教社研」とは東北大学教育学部社会学・社会教育学研究室、「宮教大」とは宮城教育大学を指す。	

私が参加した中国農村調査(関連する交流のための中国訪問)		細谷 昂				
年次	引受機関	日本側参加者	訪中課題	対象地・対象者	関連課題	その他事項
1988.10	河北省保定市河北大学日本研究所(佐藤繁実氏の紹介)	田原音和・細谷・佐藤繁実	共同農村調査(交渉・予備調査)	保定市満場県東馬村(概況聴取)	日本語教師派遣依頼	河北大学専攻棟泊
1989.9	河北省保定市河北大学日本研究所(孫執中・郭士信)	田原・細谷・不破和彦・長谷川公一・佐藤繁実	共同農村調査(予備調査)	保定市満場県東馬村(農家・集団企業面接)		同上
1990.6	河北大学日本研究所(同上)	田原・細谷・佐藤繁実	共同農村調査打合せ	唐山市豊南県(稲作地域の視察)		孫執中・郭士信日本招待の件相談
1990.10	河北大学日本研究所(同上)	田原・細谷・佐藤繁実	県政府による調査対象地の概況説明	保定市満場県東馬村・豊南県営農場視察	東北大学への院研究生派遣打診	
1991.4	河北大学から共同調査不能との連絡により酒田市で対応打合わせ	菅野正・田原・不破・細谷・佐藤				
1991.9	河北大学と会談、河北省社会科学院と会談(河北大学郭士信同行、共同調査依頼)	細谷・中島信博・佐藤	河北省社科院と共同調査相談		東北大学への留学	
1992.11	河北省社会科学院(傅希忠・牛鳳瑞・劉文静)	細谷・中島・佐藤	新対象地のパイロットサーベイ	河北省辛集市新壘頭郷新壘頭村	生派遣可能性打診	中央政府文教部の方針転換らしい
1993.6	河北省社科院(傅希忠・牛鳳瑞・劉文静)	細谷・小林一穂・佐藤	共同調査の予算検討、学振申請すること	同上		
1993.10	河北省社科院(傅希忠・劉増玉・穆興増牛鳳瑞)	中島・細谷・小林・菅野正・佐藤	日程、調査票検討、現地・郷鎮企業見学	同上		
1994.7	河北省社科院(傅希忠・牛鳳瑞・趙?)	菅野・中島・小林・細谷・佐藤	新壘頭村農家調査・郷鎮企業・果樹園調査、郷政府行政の実情調査	同上		

年次	引受機関	日本側参加者	訪中課題	対象地・対象者	関連課題	その他事項
1994.10	河北省社科院（蔭院長・牛鳳瑞、傅希忠）	細谷・佐藤・不破・藤山嘉夫・中島・小林	新壘頭村高齢者調査・統計資料収集	同上		細谷河北省社科院客員研究員授与
1995.11	河北省社科院・河北大学（郭献庭）・？	細谷・中島・小林・藤山/松田苑子・若林敬子・磯辺俊彦・高橋明善	アジア社会学会議（北原淳報告等）日本人参加者農村見学	北京 江蘇省大倉市王秀村	留学希望の劉章旗と面会	
1996.6	ベチユン病院（冀軍梅・福慧妹）、河北（孫執中・郭士信・郭献庭）	佐藤繁実氏親族	ゆかりの地を案内。	河北省社科院・河北大学・ベチユン病院等		佐藤繁実氏5月歿 ベチユン病院泊
1996.10	河北省社科院（牛鳳瑞・劉増玉・穆興増張小平）	細谷・中島・藤山・小林・劉文静	中国の土地制度、戸籍制度、相続、郷鎮企業について聴取	河北省社会科学学院		
1998.10	河北省社科院（孫世芳・劉増玉・張小平）	細谷・米地文夫・佐藤利明・県大職員	県立大との交流協定のための準備	河北省社科院		
1999.5	河北省社科院（李仲華院長、張小平・孫芳・劉増玉）	沼田俊昭・佐々木民夫・佐藤利明・県大職員・劉文静	県立大との交流協定のための準備	河北省社科院、河北大学		
1999.11	河北省社科院（李仲華・張小平・李樹卿）	米地・平塚明・佐藤利明・山田佳奈・細谷	中国自然・モンゴル村落視察	河北省承德市避暑山荘・困場、蒙古包度假村、困場		
2000.5	河北省社科院（李仲華・張正平・劉増玉）	沼田・佐藤利明・劉文静・細谷	自然環境・生態農業視察	河北省邢台市前南峪		
2000.8	河北省社科院（李仲華・張小平）	細谷・佐藤利明・吉野英岐・小林・山田佳奈・徳川直人・米地	農業・林業・牧畜の専業隊・農家調査	河北省邢台市前南峪		

年次	引受機関	日本側参加者	訪中課題	対象地・対象者	関連課題	その他事項
2001.2	河北省社科院（孫世芳・張小平・劉多田・李樹卿・劉增玉）、深圳大学（高立天）	古川浩一・細谷・宮短植田真弘・県大職員	学長訪問の準備・宮短と深圳大学と交流	河北省社科院、深圳大学	深圳大学卒業生東北大院留学希望	
2001.5	河北省社科院（李仲華・楊連雲・劉多田・孫世芳・張小平・劉增玉・張小平）	西沢学長・川崎副学長・沼田俊昭・劉文静・細谷・佐々木民夫・県大職員	河北省社科院と岩手県立大との交流協定	河北省社科院、西安、始皇帝廟		河北省社科院20周年式典
2001.9	山東省社会科学学院（姚東方・秦慶武・韓青） 河北省社科院（李仲華・孫世芳）	細谷・小林・佐藤利明・劉文静	山東省の概況	黄河周辺、嬰水鎮農業・林業專業隊・經濟試験区 河北省邢台市前南峪生態農業		
2002.5	山西省政府？ 河北省社科院（李仲華・楊連雲・孫世芳・劉多田・張小平）	増田知事夫妻・細谷・劉文静・県職員・県大職員 細谷・劉文静・？	友好の翼訪中団参加 辛集市前南峪の再調査打合わせ	山西省太原、河北省社科院 河北省社科院		
2002.9	山東省社科院（姚東方・韓民青副院長・慶武） 河北省社科院（孫世芳）	細谷・佐藤利明・吉野英岐・小林・劉	辛集市新壘頭村の再調査	河北省辛集市新壘頭村農家（前回と同一農家）・郷鎮企業		
2003.8	河北省社科院（周振国院長・李前員長・張建強・穆興増・劉多田・劉增玉・張小平）	細谷・中島・小林	新壘頭村の概況、郷鎮企業調査、農家調査	新壘頭村の郷鎮企業、前回と同じ農家、村民委員会		
2004.3	河北省社科院（楊連雲・穆興増・張小平・彭建強・孫世芳・王晔） ベチユーン病院（冀軍梅・福慧妹）	細谷・佐藤利明・吉野英岐・蠟崎奈津子・小林一穂・劉文静	辛集市現況調査、郷鎮企業調査、農家調査	河北省辛集市新壘頭村現況調査、郷鎮企業・農家調査	県立大蠟崎奈津子ベチユーン病院見学 学独自行動	

	引受機関	日本側参加者	訪中課題	対象地・対象者	関連課題	その他事項
2005. 7	河北省社科院（周院長・張小平・孫世芳）	岩手県大谷口誠学 長、細谷、吉野英 岐、県立大職員	岩手県立大学長河北省 社科院表敬訪問	河北省社会科学学院、秦皇島 市北戴河、天津市	河北省社科院で 谷口学長講演	
2008. 3	山東省社科院（韓民青副院長・秦慶武・姚 東方）	細谷・小林一穂・ 徳川直人・劉文静	山東省鄒平県長山鎮欄 況・東尉村新農村建設 の状況、農家調査	山東省鄒平県長山鎮東尉村	細谷山東省社科院 講演	
2008. 11	河北省社科院（周文夫院長・彭建強・李 華前院長・孫世芳）	細谷・佐々木民夫 ・劉文静・県立大 職員	河北省社科院と交流、 辛集市現況調査、郷鎮 企業調査	河北省社科院、河北省辛集 市新皇頭村村民委員会、郷 鎮企業		細谷河北省社科院名 誉教授授与
2009. 9	河北省社科院（孫世芳）	細谷・小林一穂・ 吉野英岐・中島信 博・劉文静	河北省平山県（山村） 調査	河北省平山県温塘鎮（山間 地）、林業、観光業調査	河北省社科院でシン ポジウム	西柏坡（革命聖地） 見学
2010. 3	河北省社科院（周文夫院長・彭建強・穆興 増・張小平）	細谷・小林・中島・ 佐藤利明・吉野英 岐・劉文静・何淑珍	河北省平山県（山村） 調査	河北省平山県温塘鎮観光開 発、農家調査		
2013. 3	山東省社科院（姚東方・秦慶武・李善峰 社会学会会長・鄭貴武副院長）	細谷、小林一穂、 徳川直人、何淑珍	山東省の都市化、次回 以降の調査の打合わせ	山東省社科院		
注）以後、山東省社会科学学院と小林一穂を中心とする日本側共同調査団との中国農村調査は継続され、以下の「三部作」がその成果として発表された。						
①小林一穂・劉文静・秦慶武『中国農村の共同組織』御茶の水書房、2007年。						
②小林一穂・劉文静『中国河北農村の再構築』御茶の水書房、2011年。						
③小林一穂・秦慶武・高曉梅・何淑珍・徳川直人・徐光平『中国農村の集住化』御茶の水書房、2016年。						
なお、河北省社会科学学院との共同調査による報告書は次の2著である。						
①細谷昂・菅野正・中島信博・小林一穂・藤山嘉夫・不破和彦・牛鳳瑞『沸騰する中国農村』御茶の水書房、1997年						
②細谷昂・吉野英岐・佐藤利明・劉文静・小林一穂・穆興増・劉增玉『再訪・沸騰する中国農村』御茶の水書房、2005年。						



聞き取り後の懇親会にて

岩手県立大学総合政策学会 Working Papers Series No.148

細谷昂先生に聞く：戦後日本農村社会学者への聞き取り資料
(Interview with Professor Emeritus Hosoya Takashi : Record of
Interviews with Postwar Japanese Rural Sociologists)

著者 細谷昂・三須田善暢・矢野晋吾
・高田知和・牧野修也・福田恵

発行年月日 2020年12月25日

発行 岩手県立大学総合政策学会